

蒲生干潟の地形調査⑱

■ 潟湖の形に変化がみられ，東側の水際には多くの漂着物があった。

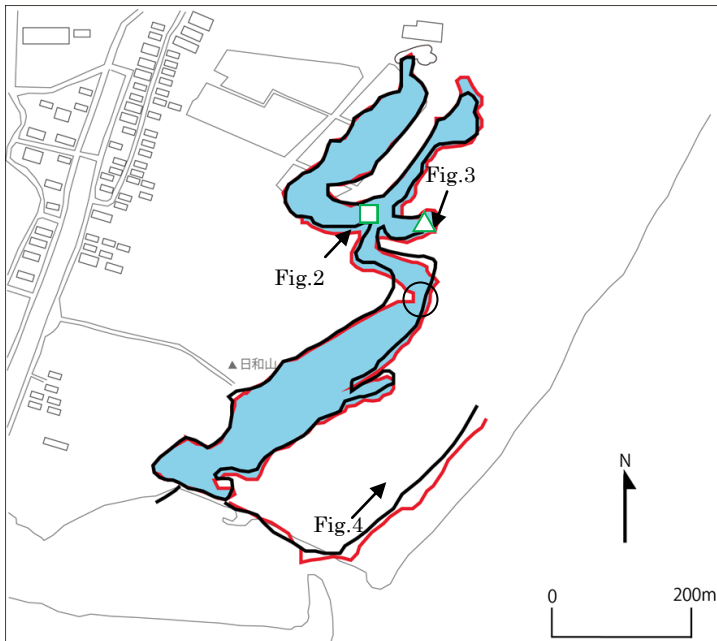


Fig.1 GPSによる簡易測量結果



Fig.2 100m近く西側に移動した金属製の漂着物。



Fig.3 潟湖の東側の水際にあった漂着物。



Fig.4 左が10月の調査時，右は12月の調査時の海岸のようす。海岸沿いにあった漂着物は無くなっていた。

調査日 2016年12月6日(火) 14:00~15:30 ※干潮時刻13:57(潮位95cm)

Fig.1の黒線で示されたものはGPS簡易測量による11月の汀線，赤線で示されたものは12月のそれである，また図中の矢印は写真撮影の方向を表している。11月の調査で水が少なくなっていた潟湖北側(No.128参照)の水位は増していた。潟湖中央付近はくびれたような形になり潟湖全体が東側に拡大していた。Fig.1で○で示した場所での水位は3cm程度の深さであり容易に潟湖を横断できた。

Fig.2の漂着物は金属製の漂着物であるが，筆者が確認しているかぎり平成26年の4月からずっとFig.1の△地点にあったものだが，今回の調査では□の地点にあり100m近く西側に移動していた。また，潟湖の東側の水際には多くの木片等の漂着物であふれていた(Fig.3)。潟湖と海との砂州では10月の調査時に多くあったタイヤや木片などの漂着物が無くなっていた(Fig.4)。今回の調査では，11月22日に福島県沖で発生した地震による津波(仙台港140cm)が砂州を越え潟湖に流れ込んだことを示唆する結果となった。

(中田 晋)